
Dream rabbit

ゆめなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D r e a m r a b b i t

【Nコード】

N 1 7 9 4 U

【作者名】

ゆめなし

【あらすじ】

平凡な中学生、蓮。

蓮はある日家に帰ると、ある兎の人形を見つける。

人形を手に取り、気がつくと、そこは別世界だった。

そこで出会ったのは「夢兎」と名乗る小さなウサミミフィードの小学生ほどの子供だった。

夢兎の正体とは？

蓮がこの世界に來た理由とは？

今此処に、一つの奇跡の物語が始まる

「プロローグ」 初兎。

兎は寂しいと死ぬ。

そんな事を聞いたことがある。

まあ、小学生の頃、俺はそれを身をもって知った訳だが…。

で、今現在俺、「神崎^{かんざき} 蓮^{れん}」は、中学校の教室で「兎は寂しいと死ぬんだからね！私、死にたくないから別れるわ。さよなら」と言われ、彼女に振られている。

自分「兎と言う馬鹿な思考を持つ女なんて最初から興味ないから別に傷つきはしないが。

告白されたから付き合った。

それだけ。

一方的に好きになられても俺はあまり人を好きになれない。
だからこんな感じで振られる事は多い。

彼女が俺の前から去ると、俺は大きな溜息をついた。

「はああ…。あーあつ！女つてめんどくせえっ！あああつ」

一人になったとたん、怒りとストレスを開放する。

教室には俺の声だけが響いた。

もう5時。

今日は部活も休みで、俺はさっさと帰ろうと、自転車置き場へ急ぐ。

帰り道、小学生が少し遅く下校しているのを見かける。

俺も小学生の頃はよく遅くまで学校に残って遊んでいた。

まあ、見つかったら先生に「早く帰れ」と言われたけど。

ちよつとした坂を上ると、赤く光る信号が見える。

「げっ、赤かよ。ここ長いんだよなあ…」

そんな事を呟きながら待っていると、隣で小さな子が信号を待っている事に気づく。

身長が低い…小学生だろうか？

まあ、小さく感じるのは俺の身長が中2にして、約170cmと言う事もあるだろうが。

あ、でもあれか。

成長期だし。慎重もそりや伸びるか。

で、いやいや。

何か俺の身長の話になってるし。

そんな事を一人で思っていると、信号が青になる。

すると、小さな子は、走りながら信号を渡る。

そんな後姿が「可愛い」とか思ったり。

無事家に帰ると、愛犬のダックスフンドが抱きついてくる。

「おわっ！？ヤナ、どしたんだよ？」

抱きかかえてやると、顔中を舐め回してくる。

「ちょ、やめろよっ」

床におろすと、リビングへ走っていく。

とりあえず靴を脱ぐと、玄関に自転車のかぎを置いて、リビングへ入る。

「母さん？…買い物か？」

リビングには誰もいなかった。

ワンワンッ

ヤナがいきなり吠え出す。

俺：いや、違う。後ろか？

俺の後ろ…誰かいるのか？

振り向いて確かめたい。でもなぜか足が動かない。思わず目を瞑る。

その瞬間、目蓋の置くに何かが見えた。

…兎…？

「っ…！？」

目を開けると、俺の足元には、今までなかったはずなのに、兎のぬいぐるみが落ちていた。

そのぬいぐるみを手に取ったのが運の尽き。

「え・・・」

何が起ったのか理解できなかった。

いきなり目の前が真っ暗になって行った。

何故こんなことになってしまったんだ？

俺はただのそこらへんにいる中学生だぞ！？

こんなアニメみたいな展開あつていいのかよ！

俺は堕ちて行った。

深い深い闇の奥へ。

その先にどんな世界があるかも知らないで。

【第一話】 会兎。

蓮^{れん}が目を覚ますと、そこは一言で言うと「別世界」。
灰色の空、紫色の雲。

そんな暗い世界の冷たい地面に酷い頭痛が襲う蓮は仰向けで倒れていた。

「っ……。どこだよ此処……」

起き上がるうとしても腕に力が入らない。

蓮は倒れたまま、以下の事を考えた。

「何故自分はこんなところに居るのか」

「此処は何処なのか」

「あのぬいぐるみはなんだったのか」

だが、どんなに考えても答えは見つからない。

答えてくれる相手が居ないのだから。

周りを見渡しても木が数本生えている程度だ。

自分はこれからどうなるのだろうか？

そんな事を考えた蓮は、後悔した。

後悔の理由は、何も食せずに此処で飢え死にする自分の姿が思い浮かんだからだ。

どこかも分からない場所で死ぬなんて嫌だ。

蓮は人が居ないかを必死で確かめる。

「……。おい！！誰か居ないのかよっ！！何処だよここ！！教えてよ！！！！！！」

力いっぱい叫ぶ。

誰かが近くに居るかどうかも分からないまま。

蓮は誰かが自分の声を聞いてくれる小さな可能性を信じた。

ザッ…

「…!!」

微かに足音のような音がした。

だが、力が入らず、その方向を見ることが出来ない。

「…。」

足音の主は、蓮の頭の前で足を止め、蓮を見下ろす。

その人物の顔を見て、蓮は驚く。

帰り道、信号に止まっていた小学生。

その小学生が今、この不気味な世界で中学生の蓮を睨みつけるように見下ろしていたのだ。

でも、一つだけ違ったのが服装と顔のピエロのようなメイク。

帰り道見た時の服装は、セーラー服だった。

だが今は、ピンクのウサミミフードと言う、世間的に言うコスプレの様な格好だ。

そして、ピエロの様なメイク。

とは言っても、白塗りにしているわけでも赤鼻を付けているわけでもなく、ただ単に涙のペイントをしているだけだ。

「…君…。誰…だ？」

蓮は、頭痛のせいで、上手く話せない。

「…自分には名前と言うものは存在しません。ですが、自分の呼び名、すなわち。呼ぶときの名前は夢兎ゆめうさぎと言います。自分は貴方をキング、すなわち。自分の上司の下へ連れてくるようにと指令を受けました。なのでこれより、自分は貴方を強制的に城へ連れて行きます。」

少し早めのスピードで、訳のわからない長い事を一方的に言われた蓮の頭の中は混乱状態になっていた。

そんな状態の蓮を、夢兎と名乗る人物は、腕を思いっきり引っ張って半強制的に立たせると、何かを唱え始める。

「
すると、蓮と夢兎の周りを闇が囲んだ。
「え、ちょ…何だコレ!？」

* * *

取り囲んでいた闇がどんどん消えていくと、蓮はさきほど居たところとはまったく別の場所に居た。
空は青く、雲は白い。

蓮が居た世界と同じだ。

そして、自然に囲まれている町が蓮の居る位置からは見えた。
その美しい風景を見て呆然としている蓮と、その蓮を見つめる夢兎の背後から、男の人の声が聞こえた。

「俺達の世界へようこそ。蓮」

振り向くと、そこには同じ歳位の少年が2人立っていた。
そして、その背後には外国にあるような大きな城。

「何だ此処…」

思わず蓮は呟く。

すると、少年の一人が微笑む。

「dream worldだよ」

「夢の…世界？」

【第二話】 食兔。

「夢の…世界…？」

蓮が呟くと、もう一人の少年が頷きながら「そう。まあ、お前の夢ではねえけどな」と、得意げに言う。

「え…じゃあ誰の…」

それを聞かれると、少年はムツとした顔になる。

「そんなの知らねえよ。誰のかわらないけど、俺たちはこの世界に生まれた。そしていつのまにか俺はこの国の王になつていたんだよ」王と言う単語に蓮は耳を疑った。

この自分とあまり歳も変わらないであろう少年がこんな素晴らしい世界の王という事に驚いたのだ。

「夢兔。お前はこれから宴会の準備へ向かえ。こいつを案内するから、終わるまでには完了しておけ」

少年は、夢兔と呼ばれる子供に、容赦なく命令する。

だが、そんな命令にも顔色一つ変えずに「了解しました」とだけ言い、夢兔は城の裏へ走っていく。

蓮は、ここまで連れて来てくれた夢兔が去ったとたん、不安になる。すると、もう1人の白髪の少年が蓮に握手の手を差しだした。

「はじめまして蓮。僕は彪雅^{ひょうが}。僕もこの国の王。これからよろしく」彪雅と名乗る少年は、笑顔で言う。

蓮も手を差し出すと、笑顔のまま、彪雅は蓮の手をとった。

「あ、そういえば俺もお前に自己紹介してないっけ。俺は珀雅^{ひゃくが}。ちなみに、彪雅は俺の弟だから。」

蓮は、珀雅の言葉を聞くと、さっきまで持っていた違和感の正体が分かった。

「だから2人の顔は似てるのか」

その言葉を聞くと、2人は顔を見合わせる。

「似てないよ？」

「似てないぜ？」

…。

（似てるじゃん）

「ま、そんな事は後でいいや。とりあえず中に入ろうぜ。城の案内するし。」

珀雅は蓮の腕を掴むと、少し強引に引つ張る。

「え、ちょ…」

* * *

大広間

夢兎が大広間へ入ると、2人の人物が夢兎の元へ走ってきた。

「先輩つ任務ご苦労様です！宴会の準備、後少しですよ」

最初に夢兎に話しかけてきたのは、夢兎と同じ格好の小学生くらいの少年だった。

「…そうですか。ご苦労様です刹兎。」

刹兎と呼ばれる少年は笑顔で「はい」と答える。

「お疲れ様です夢兎さん。こちらは後は食事準備のみです」

次に話しかけてきたのは刹兎や夢兎より、もっと小さな少年だった。

夢兎は、その少年の頭をなでる。

「ありがとう雪兎。今から食堂へ向かいます」

夢兎は、2人を連れて食堂へ向かう。

食堂

「…これは何ですか」

夢兎の前には兎の丸焼きが置かれていた。

「はい！兎の丸焼きですっ」

刹兎は元気よく答えた。

「そんな事が見れば分かります。自分は、これを蓮様が食できるかと聞いています」

昔は、兎の肉を食べる事も不思議ではなかったが、現代ではあまりない事を夢兎は知っていた。

もし食べたとして、あまり口には合わないだろう。

「人間って何でも食えるんじゃないんですか？」

刹兎がそんな質問をすると、夢兎と雪兎は同時に溜息をつく。

「人間の方が自分達より遥かに食せるものは少ないですよ」

それを聞くと、刹兎が「えええ！？」と驚いた。

「何か倉庫にありませんか？」

「あー…人間が食えるものですよね…。えっと…卵とか米とか位です」

それを聞くと、考え込んでいた夢兎に、ひとつの食べ物が思い浮かんだ

【第三話】 備兔。

珀雅^{ひゃくが}は、蓮^{れん}の腕を掴んだまま、城を案内する。

蓮は腕に少しの痛みを感じながらも、珀雅に小走りで着いて行く。

「珀雅、蓮が痛そう。離してあげたら？」

彪雅^{ひょうが}は、蓮のもう片方の腕を掴む。

「はあ？んな訳ないだろ。な、蓮」

珀雅は蓮に問いかける。蓮は苦笑いに近い表情で頷く。

すると、珀雅は、「ほらな」と言いながら、彪雅の手を蓮から離そうとする。

「っ…。そう…分かった。ごめんね、蓮」

彪雅は、腕から手を離すと、数歩蓮から離れる。

「え、いや…。別に…」

「蓮、そんな奴ほっとけ。まだ案内するところがあるし」

珀雅は再び歩き出す。

「え、ちょ…」

* * *

大広間

彪雅を置いて、大広間に到着してしまった2人。

大広間には宴会の準備をしている兎の格好の子ども達が居た。

「うわっ、珀雅様！も、申し訳ございませんっまだ食事のご用意が

…」

始めに珀雅に気付いたのは小さな少年だった。

少年は頭を深々と下げる。

「刹兎^{せつとう}…。夢兎^{ゆめうさぎ}がいながら何やってんだクソガキ…。」

「あ、先輩は食事の準備してます」

「はあ！？まだそんな事やってんのかよ！？ごめん蓮、ちょっと待ってろ」

珀雅は、蓮の腕をやつと放すと、代わりに刹兎の腕を掴み、食堂と思われる場所へ連れて行く。

* * *

食堂

「おい夢兎！お前ふざけてんのか！！何ちんたらやってんだよ！！」
珀雅は勢い良く食堂のドアを開ける。

「ひうつー！！ご、ごめんなさい！！ごめんなさい珀雅様っ！！」

謝ったのは雪兎^{ゆきと}であり、夢兎ではなかった。

「雪兎、うるさいですよ。申し訳ございません珀雅様。準備は整いました。他の部下にもお客様の迎えへ向かわせています。」

夢兎はいつも通り冷静に受け答える。

「あの…珀雅？」

蓮が食堂を覗くようにドアを開ける。

「あ、蓮。いたの？」

「あ、ああ。何か。騒がしかったから」

「ごめん、もう準備できたらしいから、大広間で待ってろ」

珀雅は蓮を追い出すように食堂から出すと、夢兎は、料理を並べ始める。

「なんだコレ。」

珀雅は夢兎の手にある見たことの無い料理を見て首を傾げる。

「ああ、これは人間界の食べ物です。何でしたっけ、オムライス？」
剎兎が満面の笑みで答える

夢兎は、雪兎の手を借りながら並べていく。

「珀雅様。準備整いました。」

「了解、おつかれさん。じゃ、俺もそろそろ蓮のところ行ってくる」

珀雅はそっぴいなから食堂を出て行く。

「…はい」

夢兎は、食堂からすでに出て行った珀雅へ深々と頭を下げた

【第四話】 迷兔。

大広間へ再び戻ってみると、先ほどまでは準備をしていたはずの人が居ない。

その代わりに、大勢の来客人が居た。

「蓮れんの席は夢兔ゆめうさぎに案内させるから、ついていけ」

多少命令口調な珀雅びやくがに少し顔をムツとさせた蓮だったが夢兔が

「…こつちです」

と、言いながら蓮の腕を軽く引つ張ると、蓮は人混みの中、夢兔についていきだした。

「おい。お前さつき準備してたんじゃ…」

「部下に頼みました。現在の自分の任務は貴方を席へ着席させ、その後貴方の護衛をする事です。」

これが本当の即答と言う物だろうかと蓮が思うほど夢兔はすぐに返答をした。

「・・・」

少々人にぶつかりながら進む蓮を他所に小柄なため人に当たらずに進む夢兔はズカズカと1人で進んでいく。

ついに夢兔を見失ってしまった。

人が多いため場所も確認できない。

「マジかよ…。」

思わずいつものように叫びたくなったが、さすがに今の状況で叫んだらただの変人だと思い、思いとどまる。

何をすればいいのかオロオロしていると、背後から声が聞こえた。

「どうしたの？」

「え」

振り向くと、そこには蓮と年齢もあまり変わらないであろうと思う少年が立っていた。

だが、決定的に違うのは、その少年の男とは思えないほどの美しさだった。

青い瞳に綺麗な黒髪。そして白い肌。

男である蓮でさえも惚れそうなほどの美少年だ。

蓮が少年を見ていると少年が口を開く。

「ん？僕の顔何かついてるかな？」

「え、あつ…。いや、すみません。えっと…俺、どうやら迷子で…」
大広間で迷子と言うのは人が多くてもそうそうない事と蓮は分かっていた為、小声で伝える。

「そうなんだ。あ、僕探してあげようか？」

「え、でも悪いですし…」

「全然！開式まで暇だし。もしかして迷惑？」

少し残念そうに聞く少年の目を見ると「あ、いえ。…お願いします」と思わず承諾する。

すると、少年の顔は笑顔となり、蓮の手をとり、握手した。

「僕は金雪^{かなゆき} 咲斗^{さきと}。よろしく」

「え、あ、神崎 蓮です。」

「敬語なんて使わなくていいよ、蓮」

「あ…ああ。よろしく、咲斗」

「さあて、蓮が探してるのはどんな人？」

咲斗と名乗る少年は周りを見渡しながら尋ねる。

「ん…。あ。ウサミミフードの小さな子」

蓮が答えると、咲斗の方がピクリと動く

「…え」

「え？どうした咲斗？」

「あ、いや…なんでもないよ。それにしても、結構見つけやすい格好の子なんだね。簡単に見つかりそう」

少しごまかすようなそぶりを見せる咲斗にあまり蓮は違和感を持たずに、頷いた。

「あ。蓮、あそこ」

咲斗は少し遠くを指差す。

その指の先には探している夢兎の姿があった。

「夢兎……。ありがとう、咲斗」

蓮は咲斗に軽く頭を下げると、夢兎の元へ向かおうとした。

……が

「蓮」

夢兎の方へ走り出した蓮の足が止まる。

咲斗に呼ばれ、振り向いた。

その刹那。

「……え」

「きゃああああああっっ」

多くの悲鳴が聞こえる。

蓮の体に何かの液体が飛んできた。

少しドロついたような赤黒い液体。

蓮にはそれが何か一瞬理解できなかった。

血。

蓮と咲斗の間に居た5人ほどの人物の大量の血。

それが蓮の全身へと浴びせられた。

何故？

何故血を流している？

5人の体には刃物の傷跡のようなものが残っていた。

蓮が状況を理解しようと既になくなっていてであろう人物を見つめ

ていると、その人物の背中に日本刀のような物が刺された。

「あーあ。君達のせいで当たらなかったらゴミ共」

刀は背中を抉る様にして刺されていた。

その刀を手に持っていたのは、美しい容姿を持つ1人の少年。
蓮と今までにこやかに話していたはずの咲斗だった。

「ごめん蓮。僕は君を恨んではない。でも…殺さないといけないんだ。神となる為に」

【第五話】 戦兔。

「ごめん蓮^{れん}。僕は君を恨んではない。でも…殺さないといけないんだ。神となる為に」

「咲斗^{さいく}…っ」

蓮は後ずさりしながら震えた声で咲斗の名前を呼ぶ。

すると、広間に居る人間は騒ぎ出し、いつせいに出口へ走りだす。出口に向かつていないのは、彪雅^{ひょうが}、珀雅^{びやくが}、蓮、夢兔^{ゆめうさぎ}。そして、城の使用人や、夢兔の部下だけだった。

「珀雅、たしかあの男…」

彪雅は深刻そうな表情で珀雅と顔を見合わせた。

「ああ、金雪^{かなゆき} 咲斗…蓮と同じ「神候補」の一人だ。でも…」

珀雅が何か言いかけると同時に、咲斗が動いた。

「でもね、蓮。君を殺さなくても良い方法がある。知りたい？」

咲斗は足を一步踏み出す。

「何を…言つて…」

蓮は完全に怯み、足が上手く動かない。

「それはね」

「伏せて下さい」

蓮の耳に微かに声が聞こえる「伏せろ」と。

蓮はそれが本当に聞こえたのかどうかも分からないまま、その場に伏せる。

バキッ

聞こえたのは、木の枝が折れたような鋭い音だった。

数秒待ち、顔を上げる。

すると、ついさっきまで刀を持ち、笑みを浮かべていた咲斗は床に

倒され、その上には、夢兎がナイフを構えていた。

「ああ、すみません。腕の骨、折ってしまいましたか？」

「……貴様……!!」

咲斗は夢兎を睨みつける。

「貴方は下がっていてください。ここは自分だけで何とかできます。」

「

彪雅と珀雅は蓮の腕を掴むと、出口へ向かう。

「蓮、アイツはマジでヤバイ！走れ！」

「でも夢兎……」

「夢兎なら大丈夫だ！だからもつと速く……!!」

3人は出口を出た。

「……何故貴方がここに居るんです」

「はは、分かってるでしょ」

夢兎の問いに、咲斗は笑って見せた。

「……蓮には絶対に手を出させません。」

「君には無理だよ。それに、蓮は僕の友達だから、きっと分かってくれる」

「……いやだ……。もう……。貴方は何度自分を苦しめたら気がすむんですか？」

夢兎は、ナイフを構えていた腕をだらんと下ろした。

すると、その瞬間咲斗は起き上がり、刀を再度握り締めた

「言うておくけど、僕が君を苦しめてるんじゃない。君は自分で自分を傷つけてるんだ。そんな事も分からない？」

「……!!」

咲斗は夢兎にされていたように夢兎の上に乗る。

「君はいつだってそうだ。自分が被害者だと思ってる。そんな君のせいで今までどんなに僕が傷ついたか分からないよね？」

咲斗が語りかけるも、夢兎は無表情のままだ。

「・・・分からない。・・・分かりたくも無いですよ。自分は・・・
貴方が嫌いです、咲斗」

夢兎の返答を聞くと、咲斗は悲しそうに微笑んだ。

「...そっか。はは...じゃあ仕方ないね...」

「さようなら、「夢兎」^{ゆめと}」

「

【第五話】 戦兎。（後書き）

今回は短めにしました
なのに時間かかりすぎですね…
今汗がハンパ無いです（）

【第六話】 仲間兔。（前書き）

少しグロく感じる表現が含まれます。

ほんの少しですが、それでも苦手な方はお引き取りください；

【第六話】 仲間兔

城の中を走り回る3人。

蓮^{れん}は息を切らせてきた。

彪雅^{ひょうが}はそれに気付いたのか、少し走るスピードを落とす。

「ん？…おい彪雅！蓮！遅いぞ！」

珀雅^{びやくが}はそう言うのと、さらにスピードを上げる。

「まって、珀雅。蓮が疲れてる。」

珀雅はグイッと彪雅の手を自分の方へ引く。

かなりのスピードを出して走っていた珀雅はいきなり手を引かれ、よろめいた。

「いつて！なんだよ彪雅！！」

「だから…」

彪雅は蓮へ視線を写す。

蓮は息切れし、今にも倒れそうにフラフラしていた。

城の中を約3分は全力疾走したのだから仕方ないだろう。

「あ」

彪雅は無表情でそう言う。

「あ。じゃないよ。もうここまでくれば十分でしょ。」

「あー……。ああ」

「あ」としか言わない珀雅に彪雅はため息をついた。

「それに、夢兎^{ゆめうさぎ}に任せてるし、安全だよ」

蓮はその彪雅の言葉を聞くと、今までさげていた顔をあげて、まだ息切れしたまま2人に問う。

「はあ…はあ…。夢…兎……。平気なの…かよ…」

「大丈夫？れん。夢兎はあれでも戦闘能力はこの国一番なんだよ。

それに、咲斗^{せんと}を止められるのは夢兎だけだから」

「え…？何で…」

ガガッツツ

蓮が問うと同時に、何かが崩れるような音がした。

「なんだ！？大広間の方から…」

「大広間！？夢兎と咲斗の居る」

3人は一気に走り出す。先ほどの疲れなど無かったように。

「こつちだ！」

珀雅は1人ずつしか通れない細い廊下へ曲がった。

彪雅も続いて曲がる。

蓮は戸惑いつつも2人について行く。

* * *

「さよなら、夢兎^{ゆめと}。」

グサツ……

目の前が紅く染まって行く。

とても切なくて、悲しい紅へ…。

「っ…！！」

夢兎の前では部下、刹兎^{せつと}に包丁で背中肩辺りを刺された咲斗が刹兎を睨みつけていた。

「はっ…。先輩に手えだそうなんて、俺が許さねえ…。この人の大切な人なら尚更だ。先輩を大切な人の手で傷つけて貰いたくない！」
「刹兔…。刹兔！退きなさい！此処は自分ひとりで何とかできますから！」

夢兎は咲斗の後ろにいる刹兔に叫ぶように訴える。

すると、もう一人の部下の声も聞こえた、

「だめですよ、夢兎さん。」

「ぐあ…っ」

雪兎^{ゆきこ}。だが、その人物は食事の準備をしていた時の大人しい人物ではなかった。

刹兔の隣でもう片方の肩をアイスピックで抉るように刺している。

その目は憎しみや嫉妬に似たような狂気に狂ったようだった。

「兎は寂しいと死んでしまふんですよ。夢兎さんがどんなに平気でも、僕たちは嫌です。貴方とまだ生きたい。」

「そうっすよ先輩！俺達は貴方のそばに居ますから！」

「2人とも…。」

夢兎は深呼吸すると、小声で何かを呟くように言った。

「

」

「！！！！！」

すると、夢兎の右手から金か銀かも分からないような明るい意色の光が放たれた。

それと同時に、強風のような物が起こる。

その影響で、咲斗は両肩を刺されたまま吹き飛ばされる。

ガガッッ

「ぐはぁっっっ」

咲斗の体は背中を壁に強く打ち付けた。

その衝撃で、刺さっていた凶器が深く刺さり、壁にも影響を与えた。

「はは、凄いですね先輩、さすがだ」

刹鬼と雪兎は慣れているのか、床に上手くしがみ付く。

「2人とも、自分の手に掴まってください。」

夢兎は両手を2人に差し出す。

2人は「はい！」と答えると、その手を取り、目を閉じる。

すると再び、夢兎は何かを呟く

「

3人は光に包まれる。

「転送魔法第一『Immediately（即）』」

3人が声をそろえてそう言うのと、その光は咲斗の元へ移動し、咲斗を包む。

すると数秒後、その光は咲斗と共に消える。

「任務完了。…ありがとうございました、2人とも。」

「いえいえ！どおってことないですよ先輩っ」

「…夢兎さんの力になれて嬉しいです」

「…。あと数分で3人方がやってくるでしょう。2人とも、その血痕を何とかしなさい」

「はいっ」

【第六話】 仲間兔 (後書き)

はっぴーえんど)

何かキリ良すぎましたね

と言つかコレで話終わってもいいような気がします)やm
でも続きます! え

【第七話】 血兔。

咲斗さきとの事件。あれから2日。
蓮れんは夢兔ゆめうさぎと共に珀雅ひやくがと彪雅ひょうがの元へ呼び出された。

「蓮。ここの生活、慣れた？」

珀雅がいつもより少し柔らかい言葉をかける。

「あ、うん…。まあ…。」

生活には慣れた。それ自体は良い事と言えば良い事だろう。

でもそれとは逆に、蓮の「何故自分がこの世界に来たのか」と言う疑問」を知りたいと言う思いが高ぶっていた。

「そっか、そりゃ良かった。…ちよつと聞きたいんだけどさ。蓮」
いきなり深刻な顔になる珀雅に蓮は動揺する。

「な、何だよ…」

「咲斗といつあった？」

咲斗の事を持ち出された蓮はまた動揺する。

2日前。血祭りと言わんばかりの風景。

思い出ただけで蓮に吐き気が込み上げた。

それに、咲斗と会ったのは夢兔と逸れた時。

ハッキリ言って、逸れたのは夢兔のミスだった。

それを言ってしまうと夢兔は罰を受けることにならないか。蓮はそれが心配だった。

少しの間の後、蓮が重い口を開いた。

「…夢兔と一緒に居…っ!？」
グッ

夢兔のブーツが蓮の足を潰すように踏みつける

「蓮の席へ連れて行く途中にはぐれてしまいました。なので、その時だと思っています。」

「は？夢兔、今なんつった。お前いい加減にしろよ？何だよそれ。」

珀雅は夢兎の方へ一步踏み出した。

夢兎は顔色を変えなかった。一つ違うのは、少し俯き加減になっていると言う事。

「申し訳ありませんでした。全て自分のミスです。」

「…はあ。ま、いいけどよ。お前が咲斗追い払ったんだし。で、夢兎と逸れた間に咲斗に会ったんだ」

少し安心した蓮は軽く頷いた。

「実はな、蓮。咲斗は…お前が此処へ来る一年前に…お前が見つかった場所で、同じように見つかったんだ。」

「…は？」

蓮は思わず素で答える。

「蓮、お前が何でこの世界に来たか分かるか？」

「…っ」

それは、蓮が最も知りたがっていた事だった。

なのに。咲斗の事を聞いてしまった蓮は、何故か答えを恐れた。

それを聞いてしまうと、何かが変わる。

自分の何かが。

自分に訪れるであろうその謎の恐怖に蓮は怯えた。

「この世界は、夢で構成されている。つまり、その夢の主がこの世界の神って事になるんだ。」

「神…」

蓮が呟くと、今まで喋らなかった彪雅が口を開いた。

「そう、神。でもね、この世界の住人。つまり僕たちは夢を見る事はないんだ。ただひとり、夢兎を除いてね」

夢兎が顔を上げる。

目を見開いた夢兎は、動揺したようだった。

「でもね、夢兎が眠ってみる夢は、蓮たちの世界の事なんだ。つまり、蓮たちの世界が見えるんだよ。そして、夢兎は神を探す。この

夢の世界の主を」

「やめて下さい」

焦ったような声。

その声の主は、動揺しきった夢兎だった。

「夢兎？大丈夫か？」

蓮が夢兎の顔を覗く。

彪雅は「…夢兎」と、切なげな声で夢兎の名を呼んだ。

「夢兎、お前もつと大人になれよ。俺達だって怖いんだよ。蓮が咲斗みたいにならないかって」

「え…」

珀雅がふいに言った一言に蓮は焦るように問う。

「俺が咲斗みたいにつて…どう言う事だよ」

「蓮、今から俺がお前に言う事は、お前を変えてしまつかもしれない。咲斗みたいに…な」

自分が、こんな普通の中学生が咲斗のような人格に…

そんな事を考えただけで蓮の背筋は凍りついたような気がした。

「お前は夢兎が選んだ。神候補だ。」

「神…候補…」

「そう、候補。…本当はな、咲斗も神候補だったんだ。…蓮、神候補はある力をこの世界に来た時に手に入れてるんだ。どんな力かは分からないけど。」

「やめて下さい」

夢兎が言う言葉を無視したまま珀雅が話し続ける。

「咲斗の力は、夢を打ち崩す力だった。この世界にはあってはならない力」

「やめ…つ…やめて…ください…」

夢兎は珀雅の腕を掴む。

こんなに動揺した夢兎は見たことがない。たった3日共に居ただけの蓮にも分かる。

「咲斗は力の強さに溺れて…ああなった。お前を殺そうとした理由は多分、神候補を殺して自分が神になる為だろう。」

「やめろ…やめ…ろ……。」

夢兎は隠しナイフをどこから取り出す。

「夢兎!？」

止めようとした。

止めようと思った。

無我夢中で。

蓮は夢兎の手首あたりを掴む。

何もかもを忘れて。

止めようとしていた。

ヒュッ

風を切るような音が耳元で聞こえた。

その瞬間手に激痛が走った。

蓮の手の平から血が滴り落ちていく。

「…痛い」

夢兎は手に掴んでいたナイフを落とすと、その場に座り込んだ。

「蓮…っ…はあ…はあ…」

夢兎は過呼吸のように息をきらす。

蓮は手を押さえて、フラフラとしたまま、夢兎のナイフを拾った。

「…!」

すると、気のせいなのか、ナイフについていた血が動いているように見える。

「なんだよ…これ」

【第七話】 血鬼。(後書き)

はい、意外に長くなつた上に夢兎はどしたんでしょうねw
更新遅くてすみません；；

【第八話】 力兎。

気のせいではなかった。

ナイフについた少量の血。それは蓮^{れん}の手を伝い、傷口へ戻っていく。その光景は不思議だった。誰から見ても。

こんな夢の世界でも勝手に血が傷口へ戻ることなんてない。

「な……んで……」

夢兎は蓮を疑視した。

夢兎の回復魔法を使わないと起こらないような出来事。

それが勝手に起きてしまった。

そして気付いた。

神候補、蓮に与えられた力。

修復を中心とした魔法。

神候補に与えられる力には大きく分けて3つの種類がある。

1つ目は咲斗^{さきと}のような破壊系魔法。

2つ目は破壊するほどの力を持たない代わりに、瞬間移動や記憶書き換え、自然の操りが出来る基本魔法。

3つ目は、破壊できない代わりに破壊系魔法や基本魔法を打ち崩す事ができ、回復能力を持つ修復系魔法。

そして、力ごとに必ず与えられるリスクと条件がある。

破壊系魔法は使うことに魔法を発動させた本人の寿命または身体能力を発動することに奪い、自分自身の体力を力に変えなければならない。基本魔法は使う内に感情や記憶を失い、日が落ちている時間は使えない。修復系魔法は、他人に使う事に自分の体力を削り、半径3k以内に信頼する人物がいないと発動しない。

蓮に与えられたのは、3つ目の修復系魔法。

夢兎はそのことに気付き、蓮の腕を握った。

「貴方は…。自分を信用…してくれていますか？」
いきなりの質問。

夢兎は落ち着きを取り戻していた。
蓮は咄嗟に首を縦に振る。

夢兎は少し安心したようだった。

「貴方は…。貴方は…」

…。

静かに夢兎は倒れた。

涙を浮かべながら。

【第八話】 力兎。（後書き）

何かもう急展開にしすぎましたねorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1794u/>

Dream rabbit

2011年11月13日01時32分発行